

2019/07/28

## 「心の中心に神を置く」

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましようか。」（詩篇 42:1-2）

私たち人間は、神のいのちで造られています。ですから、人は初めから神にとらえられている状態で、魂は常に神を慕い求める運動をしています。これは、誰にも止めることができない、私たちの原点です。この止まることのない普遍的な運動が基準となって、私たちはこの世界で様々な物事を意識することができるのです。この「魂が神を慕い求める運動」すなわち「神と関わろうとする運動」が、「愛」であり、「信仰」です。つまり私たちの中には「愛」と「信仰」という神と関わろうとする普遍的な運動があるのです。

しかし、これは潜在意識の中のことなので、なかなか自覚することはできません。私たちの意識には、潜在意識と顕在意識とがあり、私たちが通常意識している、五感を通して入ってくる情報による意識は顕在意識と呼ばれます。そして、魂が神を慕い求める運動は、潜在意識で行われています。

潜在意識の中で魂は常に神を求めているのですが、神は永遠であり、この有限の世界では神を見ることができないので、私たちの「意識」は、神の代わりに、何か見えるものを心の中心に置いて、それと関わろう、愛そうと働きます。しかし、何を心の中心に置いても、それは神ではないので、魂が満足することはありません。そのため私たちは、中心に置くものを次から次に取り替えて生きています。その中で、実は自分が求めているのは神なのだと気づいた人がクリスチャンになるわけです。詩篇 42 篇は、そのことを告白しています。

### ■神を中心に置くとは

私たちの魂は神を求めているのですから、神を心の中心に置けば、すべての問題は解決し、平安を手にすることができます。神を中心にするには、どのように生きればよいのでしょうか。

#### 1. イエス・キリストを信じる

神を中心に置くとは、イエスを信じることです。信じる信仰は、潜在意識の中の魂が受け持つ運動で、知識に左右されないものです。知識は、見える世界を理解する能力であり、知識で神を把握することはできないのです。

実は、この世界のすべての人が、日常的に信仰を使っています。しかし、ほとんどの場合、神に対してではなく、他のことに対して使っています。たとえば、友だちと約束したら、相

手は必ず来ると信じて出かけます。落ち込んでいる友人がいたら、「次はきっと大丈夫だから頑張る」と励ましたりします。人はいったい何を根拠に「大丈夫、絶対うまくいく」と言うのでしょうか。これらは、知識を根拠にしたものではなく、ただ信じるかどうかという信仰なのです。

私たちの中には、知識が物事を判断する道と、知識とはまったく関係なく魂が働く道とがあります。この魂の働きが信仰です。今述べたように、私たちは日常生活において結構信仰を使っているのですが、信仰は、本来神に対して使うものなのです。

余談になりますが、信仰は魂の働きであり知識に左右されないということは、すべての人に救いのチャンスがあるということでもあります。実は、キリスト教の歴史の中で、生まれてすぐに亡くなった子どもや、重度の障害を持った方など、言葉においてイエスを主と告白できない人は、天国に行くことができるのだろうかということが、何度も議論されてきました。しかし、信仰は魂の働きであり、知識に左右されないことが理解できれば、これは何の問題もないことです。

人は、その魂が神の呼びかけに応答するから救われるのであって、イエス様のことを理解して、知識で納得して、信じる告白によって救われるわけではありません。魂は人間の知識には全く影響を受けない部分ですから、誰でも神の呼びかけに応答できるのです。ですから、障害者であろうと幼子であろうと関係なく、誰でも救われるチャンスを持っています。私たちは見た目で救われたかどうかを判断する必要はないのです。つまり、救いとは、イエス・キリストを信じる告白がスタートなのではなく、あくまでも魂の問題であり、告白によって、救われたことを知識で確認できるということなのです。

イエス様は、「私の声を聞く者は救われている」「私はあなたの心の戸を叩く」と言われました。それは、魂が神の呼びかけに応答した者が救われるということです。イエス様があなたの心の戸を叩いた時、戸を開けることができた人が救われるのです。

いずれにしても、私たちは知識の影響をまったく受けない信仰を持っています。普段は友達を信じたり、自分の周りの出来事に対して使っているその信仰を、神に対して使っていきましょう。「主よ、信じます」と、神の呼びかけに応答して告白し、しっかりとイエス様を中心に置いて、イエスを信じる信仰によって生きることを確認しましょう。

## 2. 神の前にありのままの自分を告白する

イエス様を自分の中心に置くと、神の前でありのままの自分をさらけ出せるようになります。

神は私たちを無条件で受け入れてくださいます。神が人を造った時、人は裸でも恥ずかしいと思いませんでした。これは、彼らはまったく条件をつけられることなく、そのまま愛されていたため、自分を隠す必要がなかったということを意味しているのです。

しかし、今の私たちはどうでしょうか。自分を良く見せようとして色々なよろいを着こみ、本当の自分を見られるのが嫌で、まさに自分を隠す生き方をしています。これらがストレスとなって、自分を苦しめているのです。

しかし、私たちが、神を自分の中心に置き、神と向き合うと、自分の思いを正直に神に告

白できるようになります。こうして自分の罪を告白すると、「それでも私はあなたを愛している」という神のまったき愛が見えるようになり、こんな私でも神がすべてを受け入れて下さっていると気づき、自分を隠そうとして自分を苦しめる生き方から解放されます。それが私たちの平安になるのです。

あなたは、神の前に隠し事をせず、正直に自分を表しているでしょうか。もしそれが出来ていないのなら、まだ神をあなたの中心にしていないということです。生きた神が中心に来ると、自分のありのままを告白せずにはいられなくなります。そうすると、「神はこんな自分を無条件で受け入れてくださっている」「こんな自分でも愛されている」ということを体験するのです。これは知識ではなく、信仰です。神とこのようなやり取りをする経験を持つことによって、信仰で神の愛を知り、神の愛に動かされるようになります。

### 3. 行いが喜びになる

人は、愛されていることを知ると、これまでの愛を求めてきた生き方から、愛することを求める生き方に変わります。それまで私たちの生き方は、良く思われたい、愛されたいという、受けることで喜びを得ようとする生き方でした。しかし、神を中心に置いて、自分が愛されていることがわかるようになると、愛したいという思いがわいてきて、私には何ができるだろうかと、与えることに喜びを感じるようになるのです。

逆に考えれば、自分が受けることに喜びを求める生き方は、神中心ではないということです。本当に神中心に生き、愛されていることを受け取るならば、神と共に何かできることが喜びに変わります。

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」(ヤコブ 2:14)

「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。ああ愚かな人よ。あなたは行ないのない信仰がむなししいことを知りたいと思いませんか。」(ヤコブ 2:19-20)

信仰とは、イエスを自分の中心に置くことです。「行ないのない信仰は虚しい」とは、イエスを自分の中心に置けば、神に愛されていることがわかるようになり、必ず行いが変化するということです。

今までの私たちは、欲求を満たすためとか、愛されるためとか、自分が幸せになるために、行いを頑張っていました。しかし、神の愛を知り神が中心になると、自分が愛されるためではなく、神が喜ぶことをしたいというように生きる目的が変わるため、行いも変わるのです。聖書は、「愛のない行いは虚しい」とも教えています。自分が何かを得るために行いを頑張るのではなく、愛による行いでなければ何をしても虚しいのです。

神を中心に置いたときの心の態度を、神がモーセに与えた 10 の戒めから学びましょう。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。  
あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。  
あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。  
安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。  
あなたの父と母を敬え。  
殺してはならない。  
姦淫してはならない。  
盗んではならない。  
あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。  
あなたの隣人の家を欲しがってはならない。」(出エジプト 20:2-17 より抜粋)

これらの戒めは、ただ行いを実行すれば、自動的に喜びがついてくるというわけではありません。何をするにしても、まず心の態度が重要であり、私たちがその態度を手に入れるには神の愛に動かされるしかありません。

十戒の 1~4 は、神を愛する態度です。その中心は礼拝です。神を中心に置いて、神の愛を知ったら、神を愛したいという願いが起き、神を礼拝し賛美することが自分の中心になるのです。

「礼拝を守る」という形にこだわり、律法主義に陥るのも困りますが、神を中心に生きたいと願うなら、まずは礼拝を守りなさいと十戒は教えているのです。

イエス様も、「多くの罪を赦された者は、多く愛するようになる」と語られました。自分の罪は赦された、神に愛されている、と本当に知ることができれば、神を愛したいという願いが生まれます。その動機から行いを実行してもらいたいのです。

さて、十戒の 5~10 は、人に対する態度です。神を愛するとは、人に対する態度も変えるということだと十戒は教えています。そういう態度を持った上で、行いを実行せよということであり、行いを実行していれば、信仰があるというわけではありません。まずは神に愛されている自分を知ることが重要であり、その結果、神に対する態度や人に対する態度が変わり、そして行いが喜びとなって行くということが重要なのです。

神様のために何かをしたいと願いが生まれたら、具体的に何をすれば良いかは、祈りながら一人一人が神との交わりの中で見つけましょう。神様が一人一人に与えている使命を悟ることができれば幸いです。礼拝に結びつく行いとしては教会での奉仕があったり、救いに結びつく行いとしては伝道があったりしますが、行いの内容によって喜びに違いがあるわけではなく、神と共にできることが喜びです。それらは、すべて神の栄光に結びつくものです。神様があなたと共にやりたいと願っておられることがありますから、それぞれが祈り求めてみましょう。これまでは自分が何かを得られるように自分に結びつく行いを求めて生きてきた私たちですが、神と共に行動することが喜びになれば幸いです。

神を自分の中心に置くとは、ただイエスを信じることではありません。本当に神を中心に

置くならば、個人的にイエス様と向き合うようになり、ありのままの自分を神にさらけ出し、愛されていることに気付くようになります。そして、神の愛に強く動かされて、神に対する態度も人に対する態度も変わってくるようになります。そして、神と共に何ができるかを探し、仕えることが喜びになります。

受けるより与えることが喜びになる……これが私たちにとっての幸せです。世の幸福論は、自分が何を受けられるかを考えますが、神の国の幸福論は、神と共に何ができるかを教えます。

礼拝の椅子を温めるのも奉仕であり、祈る奉仕があり、献金という奉仕もあります。大切なことは、受けることではなく、自分にできることを行なうことです。受けることばかり考えて、受けられないとつぶやくのは、幸せな生き方ではありません。私たちの中心はイエス・キリストです。イエス様が教えているように、神を愛し、人を愛することが中心になり、行いにつながれば幸いです。